

# 觀察のさせ方(三)

東京女子高等師範學  
校附屬小學校主事

堀

七

藏

## 一

既に説明したやうに吾人の統覺作用には五つの階段がある。同じ繪を觀察してその結果行はれる統覺作用が發達の程度によつて異なる。第一が個物期で、幼稚園時代の幼兒から尋常小學校一年生にかけては専らこの個物期である。繪畫中の孤立した物又は人物のみを觀察し或は實際孤立しないものを、觀察の際分離して個々別々に統覺するものである。それが尋常小學校二年生から四學年にかけて兒童は人物の活動、事物の作用に着目し、多くの事柄の中から是等を選択して觀察するやうになるので、この時代を活動期といふ。更に十歳に達すれば事物の時間空間及び因果の關係に留意し、觀察物を總括的に把握せんとするもので、この時代を關係期といふのである。更に性質期情趣期と發達して大人の統覺作用が行はれるものである。かく統覺が發達し發達の狀況によつて觀察する事項にも

亦觀察の仕方にも相異があるのであるから、幼兒に觀察をさせるに當つては十分考量せねばならぬ。この主要な點を上げると、大人の觀察を幼兒に強ひてはならぬ。情趣期にある大人の觀察と個物期、せいふ活動期にある幼兒の觀察とを同一に考へてはならぬことは無論である。大人の保姆には明白な觀念でも幼兒には著しく不明白であるのである。従つて大人に觀察の必要が全くなくとも、幼兒には十分觀察させねばならぬものが甚だ多いし大人には全く興味のない事物が幼兒にとつてこの上もなき興味を喚起するところが甚だ多いのである。

殊に幼兒には事々物々悉くがその觀念を明白になすため觀察の材料となるのであるから、「こんなものはつまらぬ」と保姆が輕視してはならぬ。

また保姆には明白な觀念でも幼兒には甚だ不明瞭な事物が多いのであるから、繪本を見せたり説明することを以て

實物の觀察の代用としてはならぬ。繪本を見て事物を統覺するときには必ず既に實物を觀察してあるか、又は既有的觀念から想像し類推し得るものでなくてはならぬ。例へば全く象を見たことのないものが象の繪を見たときと象を見たことのあるものが象の繪を見たときの統覺作用には著しい相異がある。繪の象を見ても象の鼻がどんなに動くか、どんな働をなすか、十分に想像出来るのは既に象を觀察し象の明白な觀念を有するものに限る。未だ曾つて一度も象を見たことのないものまた全く象の觀念を有しないものが象の繪を見るときには象の大きさも象の鼻の働も中々想像出来るものではない。象の鼻がどんな働をなすか、假りに大人から十分説明しても未だ一度も象を見たことのない幼兒には想像がつくものではない。また山間の幼兒や兒童で未だ一度も海を見たことのないものに、海には波が立ち、海ははてしなき位に廣いもので、水天の界が分らぬ、海の水は大變しほからいなどと説明しても、亦繪を見せても容易に海を想像出来るものではない。従つて小學校の理科でも幼稚園の觀察でも常に實物を必ず觀察させるやうにせねばならぬ。必ず實物の觀察を出發點とせねばならぬ。殊に

想像すべき觀念が明白を欠き貧弱である幼兒に對しては實物の代りに繪本を見せて觀察と考へてはならぬ。況んや教師が説明したり、教師が幼兒に代つて觀察したりして幼兒に觀察させたとなすことは甚だ不適當である。幼兒各自の感覺器官を十分働かせて觀察させてこそ眞に觀察させるものである。教師や保姆が幼兒に代つて觀察して、しかも幼兒に觀察させると誤解してはならぬ。また觀察のとき十分實物を觀察させずして教師保姆の有する觀念を幼兒に説明して觀察をさせたなどとなすは以つての他といはねばならぬ。ところがこのやうなことが今日保育項目中の觀察に於て多く行はれてゐるのは甚だ遺憾である。「かたつむりは軟體動物ですよ。身體が軟かいでせう。それから足がないけれども匍匐するものです。貝殻は左巻と右巻とあります」などと、教師や保姆が自分の知つてゐることを、單に説明しかたつむりの實物を本當に幼兒に觀察させないといふやうな似而非なる觀察が多く行はれるのは單に保姆の有する觀念を説明するにすぎないのである。かゝる似て非なる觀察ならば寧ろ行はせない方がよい。間違つたことを想像したり、死んだ知識を多く記憶したりしないだけでも

よいのである。

今日観察と稱して自然物や人事上の事物を實際よく観察させずして、單に小學校に於ける理科の知識などを説明するが如きことの多いのは誠に遺憾である。小學校の「理科」でも成るべく實物を觀察せしめ實驗せしめて眞に觀察し研究せしめるものであるが、幼稚園の「觀察」では事物の明白な觀念を得しめ、また感覺器官を練習し、觀察力を涵養するために實物を本當に觀察させねばならぬ。

## 二

話が一寸横道にそれるやうであるが、本年三月東京女子高等師範學校保育實習科の入學試験問題として「左の動物は何處で呼吸するか。(イ)ふな、(ロ)かひこ、(ハ)かへる(ホ)みみず、(ヘ)かめ」といふのを提出した。ところがその答案の中にも頗るふるつたものが多い。ふなは口で呼吸する。かへるは鼻で呼吸する、といふのはまだよい方である。かひこは呼吸するものと思はず、みみずはどこで呼吸するかわからないものが甚だ多い。中にはかめは心臓で呼吸する」とか「かめは甲羅で呼吸する」とかいふ如き奇答が平氣で書かれてゐる。成程自分も鼻で呼吸せず、口で呼

吸する位の人が多いのであるから、ふながどこで呼吸するか知らないのは當然である。ふなが口で水のをのみ鰓孔から水を出すことは知つてゐても、それとふなが鰓で呼吸するといふ動物學の教授で學習したことは無關係であることが多いからである。動物の教授に於てふなは鰓呼吸をなすことは單なる死んだ知識として學習せられてゐるに止まるからである。またかへるは兩棲類であるといふ死んだ知識があつても、おたまじやくしのととき鰓で呼吸し、かへるになると肺で呼吸をなしてゐることが、眞に觀察し理解せられてゐないものが多い。また龜には甲があつてその中に頭や脚を引込めることは知つてゐるが、龜がどこで呼吸するものか考へたこともなく、また教授もせられなかつたものが多いのである。しかしそれにしても龜が甲で呼吸するとか心臓で呼吸するか考へるものには殆ど動物學の基礎觀念がないといはねばならぬ。人間の呼吸作用が心臓で行はれると誤解してゐる位であらう。また如何に龜の呼吸するところがわからなくとも甲で呼吸するとなすに至つては龜そのものゝ正しい觀念が全くないといはねばならぬ。要するにかゝる奇答を平氣でなすものが多いことは女學校の動

物でも植物でも本當に觀察させて正しい認識をなさしめ正しい觀念をつくることに大に欠けるところがあるものといはねばならぬ。そしていろ／＼動物や植物などについて實物をはなれ、教師のもつてゐる觀念について説明したり動物植物等の教科書にある死んだ知識を單に記憶してゐるにすぎないものといはねばならぬ。中學校や女學校の生徒になれば今までにいろ／＼の事物を多く觀察し、それ等の觀念は不明白でも多くもつてゐる。しかし小學校の低學年兒童や幼稚園の幼兒になると自然物でも人工物でも多く觀察することが出來ず、それ等の觀念の數も少く、またその觀念内容も不明瞭な點が甚だ多いのである。それを教師がもつてゐる觀念を説明して觀察の代用としたり繪を見せて満足するが如きことは眞の觀察ではない。また幼兒に實際觀察させずして教師が代つて觀察して、幼兒に觀察させたとなすが如きことも誠に誤つたことといはねばならぬ。觀察ではいふまでもなく幼兒各自をしてその感覺器官を働かして自然人工物等を十分觀察せしめ、事物を明白に認識せしめて事物の明白なる觀念を得しむると共に幼兒自身の感覺器官を練磨し事物を精密に觀察する能力を養ふやうに努力せ

ねばならぬ。幼稚園保育項目に於ける觀察は教師の理科的説明などを行つて時間を空費するが如きは決して眞の觀察ではない。またいろ／＼の理科的知識の説明をなして觀察させたものとなすが如きは以つての外といはねばならぬ。

### 三

幼兒各自の感覺器官を働かして幼兒各自が認識するやうに觀察させねばならぬ。そのためには觀察すべき事物が豊富に得られ、幼兒が十分その事物から刺激を受け、それに應じて各自の感覺器官を働かしてそれを眞に觀察するやうでなくてはならぬ。保姆の方で小さな實物をつさし上げて、「サアこれを御覽なさい。この脚は趾が五本ありますよ。こゝに眼があります。これが鼻の孔ですね。これが甲羅でせう。甲羅は堅いですね。それで頭でも尾でも脚でも甲の中に入れて身體を保護するのですよ。分りましたか。龜はね、歩くことが大變のろですよ。それで龜と兎と競争したことがあります。どちらが勝ちましたか。そうですね。龜が勝ちましたね。どうしてのろい龜が勝つたのでせうか。分りませんか。それは兎は油斷したでせう。けれど龜は油斷しませんでしたね。それだから龜は勝つたので

すよ。あなた方も油断をしてはいけませんよ。油断大敵といつてね。油断をすると兎のやうにまけるのです。油断をしないとのろい龜でも兎に勝ちますよ。よく覚えて置きなさい。誰さん「もしもし龜よ」を歌つて御覽なさい。……さうく大變お上手でしたね。今日はこれで龜の觀察を終ります」といふやうな觀察ならば、それは眞の觀察ではない。龜のお話であつて、幼兒に龜の觀察をさせたのではない。假りに龜一匹もつて來て全體の幼兒に差上げて觀せたとしてもそれは觀察ではない。成る程龜の實物を遙拜觀察をさせたのであるから單なるお話とは幾分か違ふ。また死んだ龜でなく生きた龜を遙拜でも觀せたのであるから、繪を見せたのとも幾分は違ふ。しかし幼兒が各自の感覺器官を十分使つて觀察したのではない。教師の手で頭や脚を動かしてゐる龜の實物を遙拜しただけで、龜のいろ／＼な形態や習性を十分觀察して幼兒自ら明白な觀念を收得したのとは雲泥の差がある。保育に於ける觀察では既に述べた如く、いろ／＼龜についての知識を收得させることが目的ではない。龜についての觀念的な知識を多く授けるよりも、龜についていろ／＼の事を幼兒自ら觀察することによつて

收得し、且ついろ／＼の事物を觀察する間に感覺器官の練習をなすことを目的となすのであるから、單なる遙拜的な觀察では物になつてゐない。龜の觀察に於ては成るべく龜を澤山用意していろ／＼龜について觀察させるやうにせねばならぬ。龜を澤山用意することが出来なくば止むを得ない。一匹の龜でもよい。之れを飼育して龜が水中を泳ぐ有様、石や土の上に出て甲を干してゐる有様、また床上を歩行させてどれ位の速さであるか、また驚いたとき頭や脚をどんなになすか等、實際に幼兒がいろ／＼に龜を觀察するやうにせねばならぬ。尤も龜を無理にいぢめたり、ふんだりするが如き殘酷な取扱をして幼兒が喜ぶが如きことは成るべくさけしめねばならぬ。けれども只大人が一匹の龜を幼兒に遙拜させるが如きことは眞の觀察ではない。それで茲に繰返していふ。幼兒の觀察は常に幼兒各自の五官を十分働かして十分に觀察せしむべきもので、教師や保姆が代つて觀察したり、大人のもつてゐる觀念につき單なる説明をなしたり、また繪本を以て説明してお茶を濁すべきものではない。必ず幼兒の五官を以て觀察させることが觀察の觀察たる本領である。